

大学生の活力と学びを地域貢献に生かす試み

～大学生を世代間交流の懸け橋に～

美作大学 松原 洋子[†]

1. 研究背景及び目的

現在、地方大学に求められる役割の一つに地域貢献がある。本学は美作圏域唯一の大学として周辺地域とつながりが深く、近隣自治体と連携協定を結び大学の学びを地域に生かしてきた。それとともに周辺地域からも多くの支援を受けてきた。殊に2020年からの新型コロナウイルス流行時には学生の生活支援として農作物をはじめとして食品の寄贈があった。また、コロナの影響で経済的困窮に陥った学生の為に地域からこれまでも増して多くの寄付を頂いた。学生達もこの繋がりを大切にし、近隣地区のボランティア活動に参加し、美作圏域をフィールドとした研究活動に取り組むものも多い。このような背景がある中、2021年美咲町農業クラブより農業現場を知ってほしいと農業体験の呼びかけがあった。以来、これまでの支援に感謝し、食育教育の学習を深めるために食物学科の学生を中心に農業体験交流活動を継続している。これまで、ブロッコリーやアスパラガス、さつま芋の収穫など美咲町を始め、津山市や鏡野町の農業後継者クラブとの交流を持ちながら地域の農業支援に関わってきた。(写真1)



写真1 活動の様子

交流活動を継続するにあたり、これまでの交流について振り返り、今後の方針を構築するために美咲町農業後継者クラブにアンケート調査を行った。その結果「今後も交流活動を行いたい」、「大学生との交流活動は意義があると思う」「農業に関心を持ってほしい」などの意見が多いことが分かった。(図1)

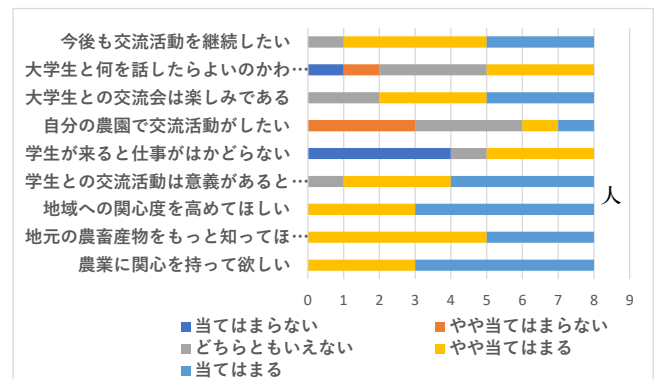


図1 大学生との交流について

この結果を基に農業クラブと今後について協議した結果、大学生は農業後継者クラブとの体験交流活動を継続し、農業の魅力を知り、地域に発信をしていく。そして、農業クラブは無料野菜スタンドを学内で開き、地域の農産物について大学生にPRしていくこととなった。今年度は介護福祉士を目指す専攻科学生がこの活動に加わった。そこで、農業体験を地域の高齢者との交流に生かし、大学での学びを地域貢献に活用する実践の検討に取り組むこととした。

2. 実施内容

(1) 農業体験交流

今年度は同一作物に複数回かわり、作物の生育や収穫を得るための年間作業を知ることにした。

美咲町小島梨園にて2023年5月に学生13名、緑桜会（美咲町農業クラブ後継者会）5名が梨の摘果作業を行った。園主の小島さんの説明を受け、作業を行いながら農業クラブ員と作業のコツや自家での栽培について交流が弾んだ。作業の後半には美咲町町長の訪問があり、学生と歓談の機会があった。また、後日、美咲町の広報誌に作業の様子が取り上げられ（写真2）、美咲町の美咲タウンテレビでも放映された。



**野菜の提供がきっかけ
美作大学生が農業体験を行いました**
5月16日、美作大学生13人が打穴西の小島梨園で梨の摘果作業を行いました。慣れない作業も終始明るく、和気あいあいと行われました。
指導したのは美咲町農業後継者クラブ緑桜会の小島さん。おとし、コロナ禍の影響で困っている学生のために、同会が美作大学構内で野菜などを無料で提供したことが始まりで交流が続いて、今年も6月7日頃に野菜の提供が行われました。

写真2 広報みさき No. 220

7月に梨の袋掛け作業を行い学生2名、緑桜会会員3名が参加した。10月は梨の収穫作業を学生2名、緑桜会会員3名が梨の収穫作業を行った。

（2）地域高齢者への調査

津山市城東町東新町会館にて「目指せ、元気！！こけないからだ講座」参加者13名にオーラルフレイルについて調査を行った（5月）

（3）地域農産物についての調査

学内にて地域の農産物について調査（6月）。参加者は専攻科学生12名。結果をグループごとにパワーポイントに纏め報告会を行った（図2）。



図2 報告会資料

（4）高齢者運動教室参加

津山市城東町東新町会館で毎週火曜日に行われている地域の高齢者の運動教室「目指せ、元気！！こけないからだ講座」に参加（7月）。共に運動した後（写真3）、学生が口腔フレイルに予防に関するレクチャーや水分補給の工夫を伝えた。休憩時間に熱中症・夏バテ防止おやつとして「トライフル」や「手づくりスポーツドリンク」を提供し、交流会を持った。（表1）



写真3 高齢者運動教室参加

表1 熱中症・夏バテ防止おやつ

献立名「カステラトライフル」		献立名「手づくりスポーツドリンク」	
材料	分量（1人分）	材料	分量（4人分）
カステラ	1切れ（20g）	水	500ml
ヨーグルト	50g（無糖）	塩	1.5g
あずき（缶）	5g	レモン汁	大1.5
季節の果物 （缶詰でも）	40g	はちみつ	大2
＊桃、キウイ、みかん			
ミント			

3. 結果

（1）農業体験交流

農業体験交流前後で自記式アンケート調査を行ったところ、「地域の農産物に興味がある」と答えた学生が交流前と比べて23%増加し、「あまり興味がない」と答えた学生はいなくなった。また、「農業に興味があるか」という問いに対して「やや当てはまる」と答えた学生が

30.8%増加し、「どちらともいえない」という学生は23.1%減少した。
(図3・4)

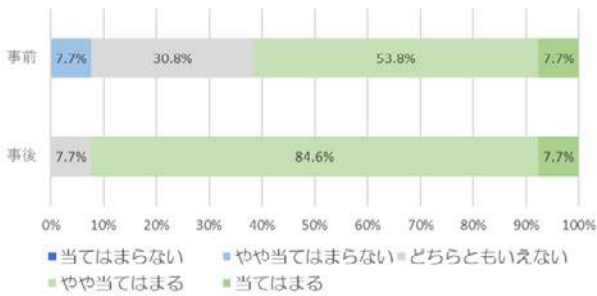


図3 地域の農産物に興味がある



図4 農業に興味がある

学生の事後レポートでは「自分が住んでいる地域の特産物以外の他で栽培されている地域の特産物なども知っていきたいと思いました」、「何かを育てることの大変さを身に染みて感じました」また、「一見介護に関係ないように見えてコミュニケーションの技術や農作業に関する点でコミュニケーション技術を活かしたり、農作業体験を会話のネタにしたりすることができると考えました」などの記述があり、交流体験を学生が有意義だと捉えていると推察できる記述が見られた。

(2) 高齢者交流

地域高齢者に健康維持に関する困りごとについて事前に聞き取り調査を行ったところ「食べることが楽しみなので、噛む力、飲み込む力の維持について知りたい」とのことであった。これを受けてまず、オーラルフレイルチェックリスト(表2)を用いて集団の傾向を見たのち①オーラルフレイル認知度、②口腔の健康

表1 オーラルフレイルチェックリスト

	はい	いいえ
1 半年前に比べて、硬いものが食べにくくなった。		
2 お茶やお汁でむせることがある。		
3 歯茎を使用している。		
4 口の乾きが気になる		
5 半年前と比べて、外出の頻度が少なくなった		
6 さきいか・たくあんくらいの硬さの食べ物が噛める		
7 1日に2回以上、歯を磨く。		
8 1年に1回以上、歯科医院を受診している。		

※東京大学高齢社会総合研究機構 田中友規、飯島勝天：作表

状態、③嚥下力・発声力の3点について調査した。

この集団はオーラルフレイルの危険性がある人(8%)と危険性が高い人(46%)を合わせると過半数を占めていることが分かった。半年前から比べて口腔内の衰えを感じている人が約25%、水分補給でむせることのある人は17%いた。年に1回以上歯科を受診している人は約50%であった。この結果を受けてオーラルフレイルについての認知度を調査したところ「あまり知らない」、「知らない」と答えた人が全体の77%を占め、「良く知っている」と答えた人は0%であった。

次にオーラルフレイルを遅らせるための運動実施頻度を問うたところ、「毎日している」、「週2〜3回している」人が約1/4、「月1〜2回している」と答えた人が半数近くであった。オーラルフレイルの認知度と遅らせるための運動の頻度の相関係数は.017でこの調査ではほとんど相関が見られなかった。(図5)

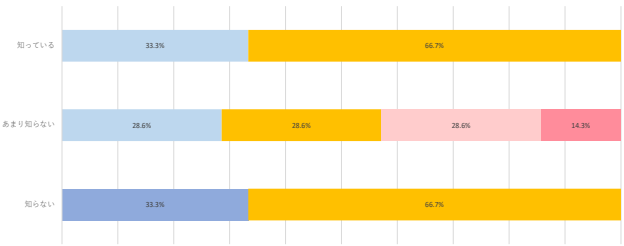


図5 オーラルフレイルの認知度別オーラルフレイルを遅らせるための運動の頻度

舌の動きは健康寿命とも関係しており、低位舌の症状が進むと、健康にさまざまな悪影響が出るようになっていわれている。調査対象者の内3名は低位舌の状態、2名は舌が浮いており、低位舌に移行する傾向が見られ

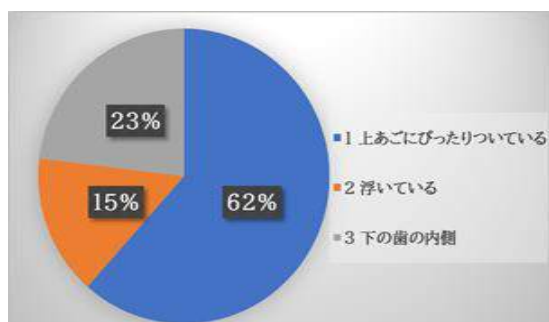


図6 舌の位置（閉口時）

た。この結果からオーラルフレイルが進行、或いは進行中の人が38%いた。（図6）

30秒間で何回飲み込めるか、飲み込む力を計る「ごっくんテスト」では、30秒間で10回飲み込む人から2回飲み込む人まで飲み込む力にばらつきが見られた。平均6回なので60代の力のある人が平均値だが、中央値は5回未満なので、75歳程度の飲み込む力のある人の集団であることが分かった。（図7）

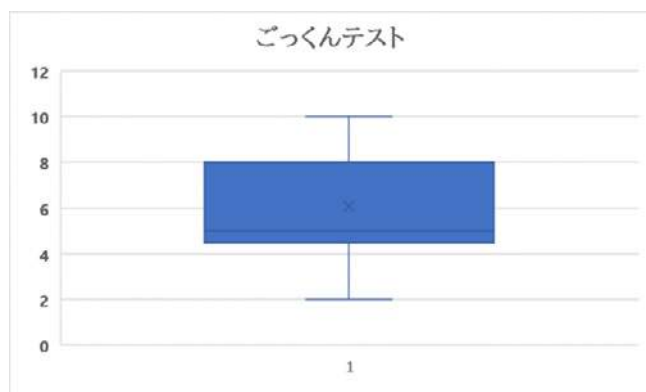


図7 30秒間で飲み込んだ回数

発声テストでは平均値中央値とも24秒だった。15秒以上発声が続けられたので、発声力に問題はあまりないことが分かった。（図8）

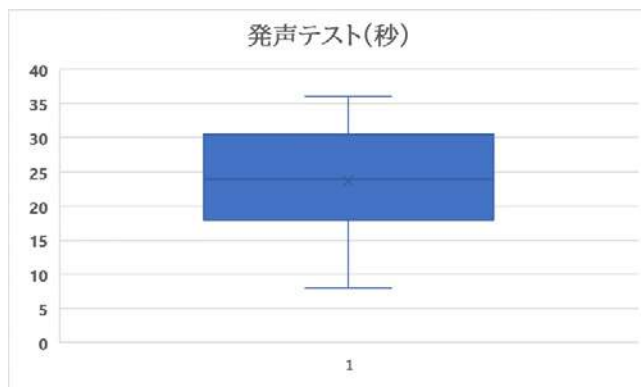


図8 発声持続力（秒）

これらの調査結果を基に高齢者健康教室に参加し、学生が口腔フレイル予防運動や水分補給時計を用いた水分の摂り方についてのレクチャーをした後、交流会を持った。交流会では双方から一緒に活動することでお互い刺激を受ける良い機会となった。大学生からは「学んでいることを高齢者のオーラルフレイル予防に役立てることができた」、「参加者からいろいろな話がきけ、人生の先輩からアドバイスもいただけた」などの意見が出、活発な交流が持てた。（写真4）



写真4 交流会の様子

4. まとめと考察

農業後継者クラブと農作業体験交流活動、健康教室に参加して高齢者の健康問題を調査し、オーラルフレイルについて啓発活動を行うとともに交流を持った。一見す

るとこれらの活動はかけ離れたものと捉えられるかもしれない。しかし、農業の担い手不足、要介護高齢者の増加、どちらも地域が抱える大きな問題を含んでいる。そして、双方を一緒に解決するための接点はほとんど見られない。そこで今回、地域の課題解決に向け、近隣地域に居住する大学生がその活力や学びを生かして、地域と共同し、実践的な活動を行うことで解決の糸口になる可能性のある方法を試みた。

その結果、農作業体験交流後、農業クラブ員から「大学生と一緒に作業はパワーが伝わってきて張り合いが出た」との意見があり、大学生からは事後レポートで「自分が住んでいる地域の特産物以外にもほかの地域の特産物なども知りたいと思いました」「何かを育てることの大変さを身に染みて感じました」などの報告があった。これらの内容から、農業クラブが交流によって期待している効果が得られたと考えられる。

一方、大学で介護福祉士をめざして学んでいることを生かし、地域の高齢者の健康不安を軽減し、要介護状態になることを予防するために高齢者健康講座（目指せ元気!!、こけない体講座）に参加した。事前調査でオーラルフレイルや水分補給方法に関心が高かったのでこれに関する啓発活動を行った。交流会では、「大学生との交流に普段とは違う刺激やためになる話が聞けて良かった」などの意見があった。大学生からは「人生の先輩に話を聞けて、これから生き方の参考になった」などの感想があり、お互い有意義な交流であったと推察できた。

以上のことから、大学生がその活力と学びを持って地域の課題解決に些少なから効果をあげることができたのではないだろうか。

しかし、高齢者の生活に水分補給法やオーラルフレイル予防運動のレクチャーが生活に取り入れられたか、追跡調査を行い啓発活動の効果を検証すること。また、収穫した農産物を高齢者に紹介し、地方食材の普及に努め、農業関係者の支援につなげるといったことは実現できなかった。これらは今後の課題である。

謝辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力いただきました

美咲町緑桜卓会の皆様、および津山市城東町「目指せ、元気!!こけないからだ講座」参加者の皆様に深く感謝いたします。

参考文献

浅沼太郎・宮本佳子(2019). 社会福祉専門職を目指す大学生による地域連携活動-地域に根差した教育実践の意義と課題の検討-,帝京科学大学紀要 Vol.15(2019)PP 191-196

原 由美子・波止 千恵・梅崎 節子・山田 美幸(2018). 地域の高齢者と大学生による異世代間交流, 純真学園大学雑誌,第7号

岡山県久米郡美咲町. 美咲町過疎地域持続的発展市町村計画(令和3年度～令和7年度)美咲町H.P

<https://www.town.misaki.okayama.jp/contents/toppdf/kasotiikizizokuplan.pdf>

オーラルフレイル・チェック：東京大学高齢社会総合研究機構 田中友規、飯島勝矢

<https://www.t-frailty.com/wp-content/themes/frail/assets/pdf/check06.pdf>

低舌位チェック

<https://kaigo-postseven.com/89170>

「ごっくんテスト」反復唾液嚥下テスト(RSST)

https://j-appa.or.jp/?page_id=2216